

個/m²以下であった(図21)。平均密度は0.049個/m²であった。推定資源量は162,938個であった。

調査時出現したシラヒゲウニは、漁期前の5月には、殻径65mm以上の1999年級群が97%を占め、40mm以下の2000年級群は3%だけであった。9月には1999年級群が成長し2000年級群と殻径組成がオーバーラップするようになった。天然群の成長調査や放流群の追跡調査によると、9月には前年生まれのウニは殻径80mmまで成長する(図10、16、17、18)ので、80mm以上を1999年級群、80mm未満を2000年級群とすると、構成比は1999年級群が5%、2000年級群が95%であった(図22)。

残された問題点

本調査は、今年度で3年目となるが、今後継続的に行い、漁獲量との関係を調べ、より精度の高い資源量推定方法を検討する。

3) 漁業実態調査

目的

今帰仁漁協組合員が調査海域で漁獲するシラヒゲウニ漁獲個数を継続的にモニタリングし、資源の状態と放流効果を把握する。

材料と方法

2001年の今帰仁漁協のシラヒゲウニ漁は7月1日に解禁され、9月初旬まで行われた。漁期中2週間間隔で7月13日、27日、8月14日、27日の4回、セリに出荷されるシラヒゲ

ウニの実入り調査を今帰仁漁協と名護漁協で行った。実入り調査では、市場に出荷される100gパックの生殖腺葉数を計数し、シラヒゲウニ1個(生殖腺5葉)あたりの生殖腺重量を求めた。また、今帰仁漁協からシラヒゲウニ出荷量に関する資料の提供を受けた。総出荷量とウニ1個あたりの生殖腺重量から、今帰仁漁協組合員のシラヒゲウニ漁獲個数を推定した

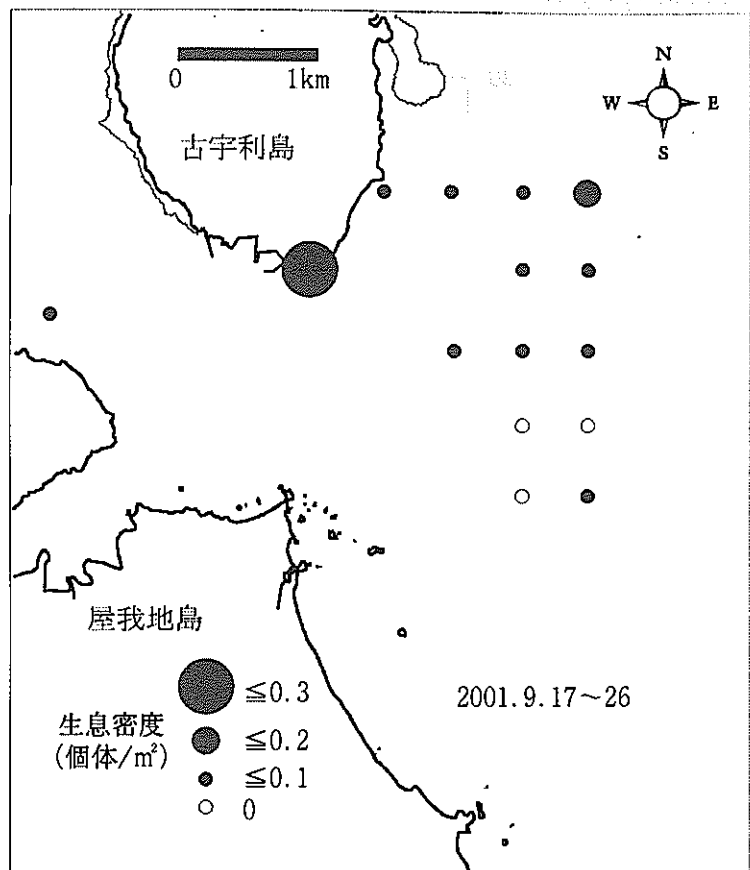


図21 シラヒゲウニの分布と生息密度(2001年9月)

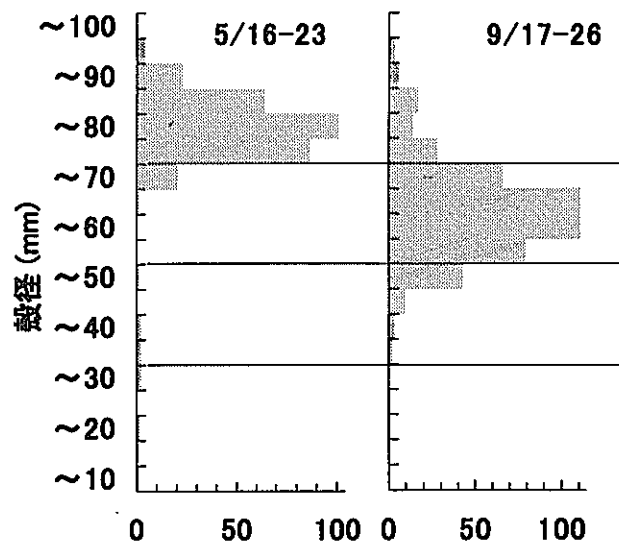


図22 資源量調査で出現したシラヒゲウニの殻径組成

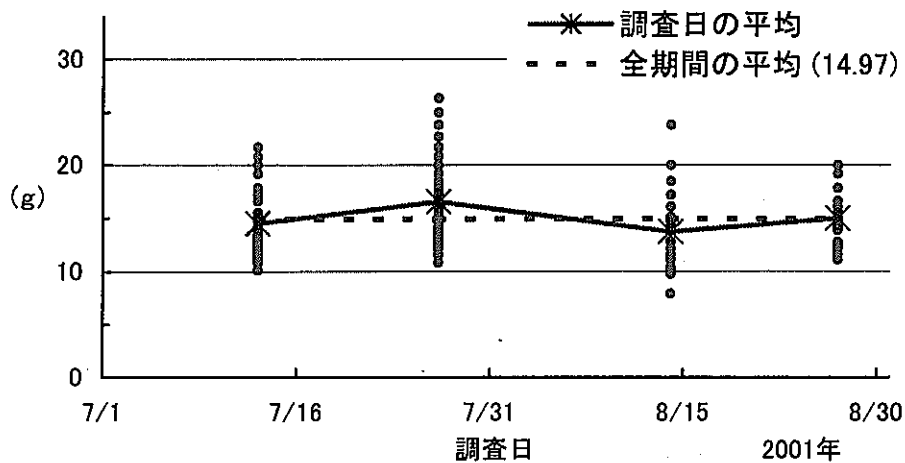


図19 シラヒゲウニの成長に伴う生息状況の変化

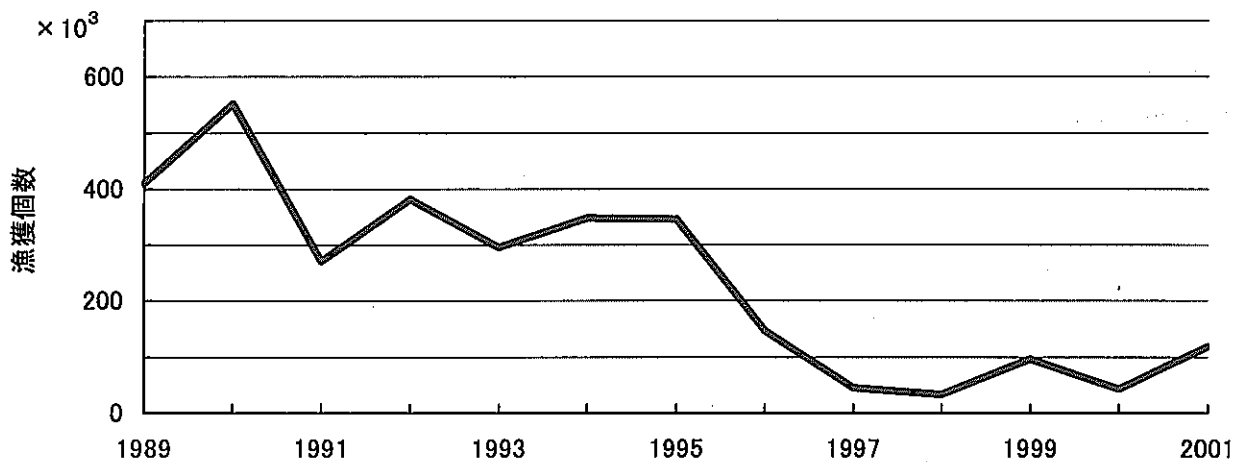


図24 今帰仁漁協のシラヒゲウニ漁獲個数の推移

結果と考察

シラヒゲウニの生殖腺重量は、各回の調査ともサンプルによる差が大きく、7月13日は10.2～21.7g、7月27日は10.9～35.7g、8月14日は7.9～23.8g、8月27日は11.1～20.0gと1.8～3.3倍の差がみられた。平均値は、7月13日14.6g、7月27日16.6g、8月14日13.8g、8月27日は15.0gと、8月14日が最低で、7月27日が最高であった(図23)。漁獲個数の推定には、全期間の平均値14.97gを用いた。

2001年の今帰仁漁協のシラヒゲウニの出荷量は、生殖腺100g詰めパックで17,883ケースであった。この出荷量と平均生殖腺重量から2001年のシラヒゲウニ漁獲個数は119,444個と推定された。今帰仁漁協の漁獲個数は、1996年以降10万個を切っていたが、2001年は10万個以上となり過去5ヶ年では最も多かった(図24)。調査海域は、他漁協との共同漁業権区域となっているが、他漁業では浜売りが主体で、今のところその漁獲量を把握できない。今帰仁漁協以外の漁獲量は、ウニ漁従事者数を考慮すると、今帰仁漁協の1/4以下と考えられる。したがって、調査海域での2001年の総漁獲個数は15万個程度であったと推定される。

残された問題点

漁獲量については、今帰仁漁協では、同様の手法で継続調査する必要がある。また、他漁協の漁獲量についても把握する必要がある。